

生涯学習情報誌

Life Learning

8

2022

Aug.

NO.384

9/1
募集開始

2022(令和4)年度

博士号

取得支援事業

生涯学習開発財団は、「人間は感動する心を失わず、何ごとかを学び続ける限り、年齢にとられない生き方をすることができる」という理念のもと1983年に設立されました。

平均寿命が延びる今、定年後も学習を継続し、社会へ貢献し続ける中高年の存在は、日本社会にとって大きな支えとなります。

財団では、現在博士号の取得を目指す50歳以上の方々を対象に、2011年度から支援事業を行っています。この取り組みを通して、来るべき高齢化社会の生涯学習を促進し、よりよい社会作りに貢献することをめざしています。

本事業は、国籍や性別を問わず、また、研究領域は文系・理系を問いません。独創的で社会的な意義のある研究を行い、博士論文を執筆中あるいは提出が予定されているすべての方に門戸は開かれています。皆様からの積極的なご応募をお待ちしております。

■ 採用予定人数

特に人数は定めません。

■ 助成金の支給

- ・支給金額は一人あたり50万円
- ・支給日は2023年3月(予定)

■ 応募資格

以下の条件を満たす者

- ・50歳以上(性別、国籍、所属を問わない)
- ・日本国内に在住している者
- ・博士課程(博士後期課程を含む)に在籍するか、論文博士号の取得をめざし、かつ実行性の高い研究計画書を作成した者、もしくは博士論文の一部をすでに作成した者
- ・日本国内の大学で博士号を取得予定の者

- ・当財団のホームページ及び情報誌にて、氏名・年齢・写真・研究タイトル・論文要旨の公開を了承する者

■ 応募方法

(1) 提出書類

- ・指定申請書
- ・身元証明書
- ・研究計画書
- ・推薦書 ほか

詳細は募集要項でご確認ください

(2) 応募締切日

2022年12月9日(金) 必着

■ 選考

提出書類および面接により選考

お問合せと募集要項の請求は下記まで



一般財団法人 生涯学習開発財団 事務局

〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-1-20 虎ノ門実業会館9階 TEL 03-3508-4551

※事務局移転のため、8/13以降は虎ノ門実業会館【8階】へ

募集要項・申請書は→ <http://www.gllc.or.jp> E-mail hakushi@gllc.or.jp

祝

2021年3月 静岡県立大学博士号(経営情報学)取得

芦川敏洋 さん(取得時62歳)

論文テーマ…地域経済の成長可能性(都道府県別・資本ストックと潜在GDPの推計を踏まえた実証分析)

47都道府県ごとの産業創出と活性化こそが日本経済再生の道

■GDPを47都道府県別に分析

国の経済成長や国際比較をするための指標とされているGDP(国内総生産)。芦川敏洋さんは博士号研究で、都道府県単位のGDPに着目した。日本経済は47都道府県経済の集合体であり、地域経済の成長可能性を分析し提言することが、日本経済再生につながるという認識からだ。

まずは、計量経済学的手法に欠かせない資本ストックデータとして、県民経済計算のフローデータを用い、資本形成累計額を積上げ算的に試算することで、47都道府県の潜在GDPやGDPギャップを推計した。国ベースで議論されていた資本ストックの伸びが経済成長に及ぼす効果や、成長の地域間格差は収束するのか発散するのかという論争について、47都道府県をサンプルにして検証を可能とした。

■研究を地元静岡県の産業振興に活かす

芦川さんは静岡育ちだが、大学と大学院は県外へ進んだ。卒業後は霞が関の官僚になることも考え国家公務員試験にも受かったが、特定省庁の分野だけでなく行政に幅広く関わりたく、静岡県庁に就職した。県庁ではのべ17年に渡って企画部に在籍し、県庁エコノミスト的な役割を意識して取り組んだ。

35歳のころ、日本長期信用銀行のシンクタンクで2年間研修を受け、日本全体を見て静岡はどうかと考えるきっかけになった。また、慶應義塾大学大学院前期博士課程にも2年間公費留学のチャンスを得て、マクロ経済学の視点での地域経済分析に関心を寄せた。50歳を過ぎ、県職員として培ってきた地域

経済分析に関する見識や成果を、博士論文にしたいと決意。静岡県立大学の後期博士課程に入学した。

現在、静岡県立大学の客員共同研究員として他の4名の教員と、地元の産業振興のための共同研究を進めている。論文審査にあたった教授が「これは面白い」と推してくれて始まったプロジェクトだ。静岡県はこれまで製造業が盛んだったが、今後振興していきたいとする医療・健康関連分野などで、産業の創出・発展を後押しする研究活動だ。

■日本経済再生はどうすれば可能なのか

現在の日本社会は、人口減少をとまなかった形での高齢化が進行しており、経済成長の面では他国と比較して低迷している。芦川さんの分析に基づく日本経済再生の可能性はあるのか。

「日本は需要不足、買ってくれないから成長しな



「妻は書道家。分野は違うけれども刺激し合って、お互いに生涯続けられる仕事にできれば」と語る芦川さん。

いとよく言われますが、それは首都圏と一部地域(愛知、静岡)の姿でしかありません。関西を含むほとんどの地方は供給不足なのです。供給とは、生産を提供する投資と労働者です。生産拠点の地方分散などと並行して、地方ごとの特質を活かした産業の創出が欠かせません。地域レベルでマクロ分析をする、山形県や長野県、京都府などは高い生産性を示します。他の地域も参考にできると思います。

人口問題についても、子供の出生率が高いのは圧倒的に地方なのです。子育てがしやすいからと言われています。若者が地方に残って働ける産業があれば、適齢期の男女のバランスがとれて、人口減少が緩和されるはずです」

■博士号取得で自信、複数の舞台で活躍

チャレンジを迷ったり、途中で苦しんだりしている人には、困難をなんとか乗り越えてやりきることにメリットをアドバイスする。

「私も定年前の1年間は仕事が大変で、実質的に休学状態でした。しかしやりきったときの達成感と自信は、人生の原動力になりました。財団の支援を受けることで、さまざまな分野の50歳以上の人が頑張っているのを感じ、さらに励みになります」

やりきった芦川さんは、県庁での実務経験と博士論文を買われて、複数の肩書きで活躍している。先の静岡県立大学の客員共同研究員のほか、静岡社会健康医学大学院大学の総務担当理事、非常勤講師として静岡県立大学(地域産業論)と静岡大学(公務労働論)で教鞭もとる。

木村浩子さん（盆栽環境研究会 代表）

盆栽という文化資源継承の一例 五葉松瑞祥の個体情報の調査 — 瑞祥の系譜調査とそのデータベース開発 —

盆栽は海外でも「Bonsai」で通じるほど、日本が誇るべき伝統文化として認知されている。1989年に第1回世界盆栽大会が開催された。2017年には第8回がさいたま市で開催され、世界中から約1万2000人が来場した。今年は、第9回がオンラインで行われる。最も人気が高いイタリアでは、日本にも存在しない盆栽の専門学校もあるそうだ。

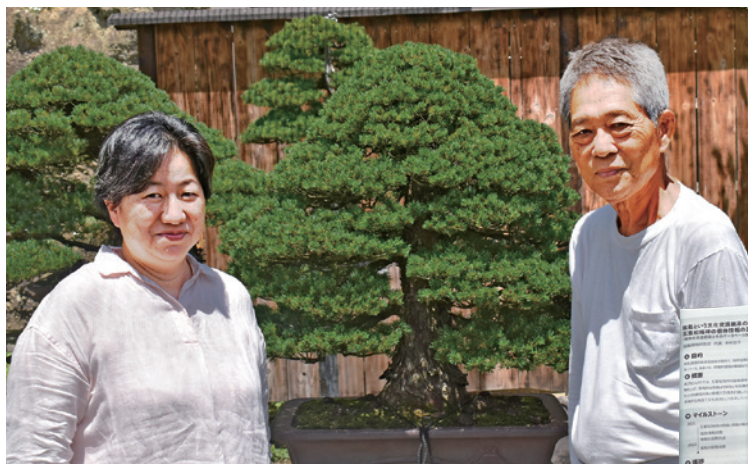
そうした人気の一方で、国内の盆栽を取り巻く環境は他の伝統芸能などと同様、継承の危機にある。愛好者の高齢化、伝聞による栽培技術継承、コミュニティの閉鎖性、投機的売買による不適切管理などの問題も抱えている。そうした状況を改善し、現代に合った情報発信や交流による盆栽ファン拡大に取り組むのが、盆栽環境研究会の代表・木村浩子さんである。

■「盆栽の困った」を「盆栽で楽しい」に

木村さんが盆栽に興味を持ったのは10年前。長年科学機器関係の仕事をしてきたが、植物を育てる仕事をしてみたくなった。花を植えたりフラワーアレンジメントを習ったりする中で出会ったのが盆栽だった。

盆栽と聞くと、おじいちゃんの趣味という印象が強い。しかも繊細で育て方が難しく、素人がうっかり触って枝を折ったり鉢を割ったりしたら大変なことになりそう。しかし、実際に向き合ってみるとおおむね偏見であることがわかるようだ。

2019年に盆栽環境研究会を立ち上げた。グルー



現存する中で2番めに古い瑞祥・相模富士の前で、木村さん(左)と師匠と仰ぐ日本瑞祥愛好会実行委員長の山口一男さん。「盆栽は道楽、つまり楽しみを極める道。所有欲ではなく、楽しんで熱心に育ててくれる人に引き継いでもらいたい。そのためには、盆栽に触れて楽しめる機会や場所がもつとあるべき。若い木村さんたちの活動には期待したい」と山口さん。



プチャットで交流をしながら、ワークショップや展示会などのイベントを通して、「盆栽の困った」を減らし「盆栽で楽しい」環境づくりに取り組む。

■昭和の名木「瑞祥」の系譜をデータベース化

瑞祥とは、五葉松の一種で、他の松よりも葉が短く密集している。その特徴は、自然界の勇壮な松の大本を鉢の上の風景として表現するのに適している。また、

他の松よりも成長が早く、個人が関与できる数十年で鑑賞できる作品に育てられる点でファンも多い。とはいえ、名がつくような盆栽は人間より長生きするのがあたりまえ。人から人へと受け継がれる。日々の手入れ次第で良くも悪くもなり、完成はない。

瑞祥の祖木は昭和初期に、神奈川県藤崎万吉氏が苗木の状態で見出したとされる。培養された後、戦後の展示会において注目を浴びていった。鈴木佐市氏によって1959年に「瑞祥」と命名された。

祖木はすでに枯死してしまっただが、祖木から、挿し木や取り木という方法で繁殖され、受け継がれてきた。動物の血統にも似ているが、DNAを種子によって引き継ぐのではなく、親木の一部を新たな子木として培養する。木村さんがデータベース化した60株あまりの瑞祥はすべて、90年ほど前の祖木・聖龍の100%分身なのだ。

■盆栽以外の文化継承にもつなげたい

今回の調査では、文化資源として優れた盆栽・瑞祥の、祖木から繁殖した系譜をできる限り明らかにし、不明情報や新たに生まれる個体も追加できるデータベースを作成した。また、『瑞祥培養ノート』として、その歴史、育て方、繁殖方法などをまとめた。先人の知見や試行錯誤に基づくものだが、これまで伝聞や見よう見まねによって継承されてきたことを体系的にまとめ、入門者でも理解しやすいテキスト化した。歴史と奥深さを持ち、生涯にわたって楽しめる盆栽文化。ファン拡大と同時に、文化資源継承のノウハウとして他ジャンルでも活かしたいとしている。



挿し木(左)。取り木のため幹から根を出させる(右)